

さまざまな知恵に出会う楽しさ

歳時記は日本文化の百科事典

歳時記の言葉に、なぜ共感やなつかしさを感じるのだろうか。

日本人の伝統文化が詰まったこの書物はどこからやってきたのか。

現代的な日常を送る私たちは、歳時記とどう付き合っていけばよいのか。

歳時記を知り、暮らしに活用するヒントを長谷川さんに聞いた。

俳人

長谷川 權

●はせがわ・かい 1954年熊本県生まれ。俳句結社「古志」主宰。東海大学文学部文芸創作学科特任教授。朝日俳壇選者。「季語と歳時記の会」代表。句集『虚空』で読売文学賞を受賞。2004年から読売新聞に詩歌コラム「四季」を連載中。

一家に一冊あるといい

この世の森羅万象を網羅する書物として百科事典があります。これは博物学の成果としてフランス革命のころにできた百科全書という本が発展して生まれました。

もちろん日本にも博物学的な成果をまとめた書物はありましたが、百

科事典自体は明治の文明開化の時代になって西洋から入ってきたものだけです。

それに対して、元来この国で百科事典的な役割をしていた書物が歳時記です。

歳時記には季語が並んでいて、その解説があつて、その季語を使った俳句が載っています。すでに江戸時代末期にはいまの形に近いものにな

っていました。ヨーロッパからきた百科事典と比べると大きな違いがあります。

歳時記ではすべての項目を春夏秋冬という季節の順に配列しています。それぞれの季節にはたとえば初春、仲春、晩春というように「初め」「たけなわ」「終わり」がありますので、全部で十二の季節のめぐりにそつて項目が配列されています。

これは、アルファベットや五十音順という機械的かつ無機的な分類によつている百科事典と比べると、大きな違いです。なぜそのようなようになったのかは、次に述べる歳時記の起源と関連しています。

日本の歳時記には二つのルーツがあります。

一つは中国の歳時記です。『荆楚歳時記』など、いくつかがありますが、時のめぐりに伴う年中行事や自然界の変化などが記された中国の宇宙観を物語る書物です。

これは農耕民族である中国の人のびとが、種まきや稲刈りなど、農作業のために使う実用的な暦のようなものだったので、日本の歳時記のように詩歌は載っていません。

もう一つの起源は、『古今和歌集』に代表される勅撰和歌集です。恋や

旅など、いろいろなジャンルがある中で、一番はじめの部に四季の歌が並んでいます。詩歌を季節によつて分けるという考え方が、この時点ですでに見られるわけです。

一方に中国をはじめとする東アジアの農耕の暦があり、一方に日本の和歌集があつた。その二つが全体融合したものが日本の歳時記なのです。

現代では歳時記はまず俳句の手引書であると考えられています。もともとは連句を巻く際の大切な手引きでもありました。連句を巻くには、花の句や月の句があるなど、四季に関連する重要な規則があるので、歳時記はなくてはならないものだったのです。

いまでは、日本人の伝統的な暮らし方を知りたいと思つたときには歳時記を引いてもらうのがいちばんです。歳時記を開けば、衣食住のこと

から年中行事まで日本のことはたいがいわかるし、さまざまな示唆を得ることができます。手紙のあいさつを書く際にも使えますし、端午の節句や七夕など年中行事を知つていれば、季節季節のお祝いもできます。暮らしに合わせた使いみちがいろいろとあるのですよ。一家に一冊あるといいと思います。

歳時記を学ぶ場

日本人にとって、これだけ重要な書物であるにもかかわらず、これまで歳時記を研究する学問がありませんでした。理由は、歳時記がさまざまな学問領域にまたがる書物だからです。

たとえば、起源の一端となった農耕を考えるだけでも、自然科学にかかわる多くの知識を必要とします。